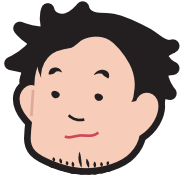


幸運と素晴らしい仲間恵まれて



東京大学 医科学研究所
教授 川口 寧

幼少の頃、本を読むことがあまり好きでなかった私は、マンガで科学や歴史を学びました。親は、普通の娯楽マンガを買い与えてくれませんでしたので、科学や歴史のマンガを繰り返し読むしかなく、いつしか記憶に刻まれ、科学に興味を持つようになったと思います。その後、ブラックジャックに姉がはまり、私も読むようになりました。その影響で外科医に憧れました。しかし、当時はあまり血を見るのが好きでなかったため、小学生の高学年の頃には、医者ではなく、人工臓器を開発する研究者になりたいとぼんやりと思うようになりました。

高校には補欠で合格しました。補欠でしたので、勉強についていけるかが不安で、入学直後はかなり頑張って勉強しました。しかし、最初の試験の成績が「ぼちぼち」だったので、すぐ安心してしまいました。しかも、数学が教科書どおりの授業でしたので、いつしか授業中に寝るようになりました。すると、いつの間にやら1学期で1年生の数学が終わってしまったのです。数学はかなりの得意科目でしたが、寝ていた分を取り戻すことはその後かなわず、不得手の科目になってしまいました。また、部活のダブルスのパートナー（現、東大医学部の基礎系の教授）が、休み時間に大学の数学の教科書を面白そうに読んでいたのを見たり、優秀な同期達（例えば、東大・医学部の基礎系の教授に4人なっていたり、学士院賞を40歳台前半で受賞していたり）

を目の当たりにして、「こいつらと頭で競っても勝負にならない、別の世界で生きなければ」と強く思いました。頭で考えるよりも、実験で実証する（汗をかいて努力する）ことが重要な医学系の生物学的研究を、現在の自分が行っている原点は、このような体験にあるのかもしれない。ちなみに上記の教授達とは、たまに会議等で会うことがあり、共同研究や人材交流も行ったりしています。

大学に進学した際は、「教養課程の2年間で人生で最も自由な（遊べる）時期」と勝手に思い込み、野球と社会勉強に没頭しました。軟式野球部に所属し（写真1）、東京6大学リーグでほとんど最下位だった弱小チームでしたが、創部以来初の準優勝を体験できたのは印象的でした。野球部の仲間は、ほとんどが文系でした。今でも準優勝時のメンバーでたまに集まりますが、彼らはダイオー



写真1 軟式野球部の頃。左端が筆者（念のため）。

幸運と素晴らしい仲間に恵まれて 2

ドの有名会社の社長や、衆議院議員でちょっと前の財務副大臣になっていたり、参議院議員や弁護士になっていたりして、各方面で活躍しているようです。当時は麻雀と下手な野球ばかりやっていた印象がありますので、日本って大丈夫なのかな？と時々不安になりますが。。。野球部の文系の仲間は、私たち理系研究者とは考え方や視点が大きく異なっていますので、物事のとらえ方や考え方に幅を与えてくれたと思います。また、私が所属する東大・医科研はガーナに海外拠点を設置していますが、偶然にも元チームメイトがガーナの日本議員団・団長で、お世話になったりしています。

学部3年生で獣医学科に進学し、4年生の時に獣医微生物学教室（見上彪研究室）に配属されました。そこでウイルス研究を開始し、

その後、シカゴ大学Bernard Roizman研究室で最先端のウイルス研究を体験するわけですが、その経緯に関しては、既に、特定領域「感染現象のマトリックス」のニュースレター（http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/Kawaguchi-lab/pdf/news_letter.pdf）や「ネオウイルス学」のホームページ（<http://neo-virology.org/feature/356/>）で紹介していますので、ご参照ください。両研究室は、多くのPI（Principal Investigator）を輩出しており（見上研究室は15名以上、Roizman研究室は米国科学アカデミー会員3人を含む50人以上の著名なPIを輩出）、両研究室の同門の研究者との繋がりは、研究者としての私の大きな財産です（写真2）。



写真2 2014年に開催されたRoizman先生85歳の誕生日を祝う国際シンポジウム
シカゴ大学で5年毎に開催されている。この回は約60人の教え子が全世界から集まった。

1. Elliott Kieff (Harvard Med., 米国科学アカデミー会員), 2. Bernard Roizman (U. Chicago, 米国科学アカデミー会員), 3. Ed Mocarski (Emory U.), 4. Joel Baines (Louisiana State U. Vet School学長), 5. Rich Longnecker (Northwestern U., J. Virol. Editor), 6. Pat Spear (Northwestern U., 米国科学アカデミー会員), 7. David Knipe (Harvard Med., Fields Virology Editor-in-Chief), 8. 五十嵐和彦 (東北大学医学部長), 9. 筆者, * Peter Palese (Mount Sinai U., 米国科学アカデミー会員: Roizman先生の古くからの友人)

幸運と素晴らしい仲間恵まれて 3

帰国後は、2つの大学を経て、現所属に赴任しました。その間(2002～2006年)、JSTのさきがけ研究「生体と制御」領域に採択していただきました。この領域では、高柳広教授(現、東大・医、以下現職)、荒瀬尚教授(阪大・微研)、野崎智義教授(東大・医)、中川一路教授(京大・医)、福井宣規教授(九大・生医研)、堀昌平教授(東大・薬)、上田啓次教授(阪大・医)をはじめ、現在の日本の感染・免疫研究を牽引している研究者が(若い頃に)参加していました。半年に1度開かれる領域会議では、アドバイザーからの、震えるほど厳しい進捗チェックに耐えつつも、夜はお酒を飲みながら傷をなめ合うといった感じで、密な交流を行うことができました。一方で、各メンバーから発表される研究の秀逸さとプレゼン能力の高さには驚嘆するものがあり、まさに切磋琢磨して研究に励んだと記憶しています。彼らとは共同研究も活発に行うことができ、Nature, Cell, PNAS, J. Exp. Med., J. Virol.といった学術誌に研究成果を発表することができました(<http://www.ims.u-tokyo.ac.jp/Kawaguchi-lab/publications.html>)。

まとまりのない話になってしまいましたが、私がこのコラムで言いたいことは、研究における人と人との繋がり的重要性です。幸運にも私は行く先々で素晴らしい人々に囲まれて過ごす機会に恵まれてきました。それ故に、多くの才能溢れる人々と密に繋がりを持つことができ、それが研究成果に大きく反映されてきたと思います。昔と異なり、最近の研究は1つの研究室のみで完結できることが少なくなり、複数の研究室の共同研究でないとレベルの高い研究がなかなかできなくなってきました。個人的には、今後、この傾向はさらに高まると感じています。その際に、重要になるのは人と人との繋がりです。それも学会で

ちょっと会って話すレベルの繋がりではなく、確固たる人と人との繋がりが求められると思います。本新学術領域「ネオウイルス学」には、若手を中心とした多様で優秀なウイルス研究者が集っています。河岡領域代表は、強力なリーダーシップを発揮されており、これまでの新学術領域研究には無い斬新な試みで本領域を牽引していらっしゃいます。これらが有効に活用され、班員間で有意義な人と人との繋がりが新しく構築されれば素晴らしいと思っています。

最後に。本新学術領域の発足で、病原性ウイルス研究に偏重されていたウイルス研究を、生体および環境恒常性因子として捉え直すという、新しい枠組みの研究体制が構築されつつあります。しかし、重要なのは新しい枠組みの構築そのものでは無く、それを利用してウイルス学における最先端の研究成果を本領域から発信することかと思っています。もちろん、最先端の研究成果を生み出すことは、並大抵のことではありませんが、本新学術領域が一丸となり、素晴らしい研究成果(論文)が生み出されることを願ってやみません。そのために、計画研究班員として微力ではありますが尽力していきたいと思っています。